

随筆 絆(ぎずな)

桧垣七郎

(会員・佐伯市下久部岡ノ谷)

その時、私は十五歳であった。

昭和十九年九月、予科練入隊を見送る村人や級友達の歓呼の声や小旗の波に埋る駅頭で、人垣の陰に隠れるようにして、涙で目をしばたきながら見送ってくれた母の顔が私の胸に強く焼きついた。

やがて、入隊後初めての母の手紙が届いた。何ともいえない胸にこみ上げてくるものがあり、涙で目が霞んで読むことができず、便所の中で思い切り涙を流して読んだ。「御身らだけに苦勞はさせぬ。母も朝早くから夕方遅くまで食糧増産に励んでいます」。

私は後に残った母に、無理をせず、何時までも長生きをしてもらいたいと心から願った。

昭和二十年になると、私達のいた名古屋への空襲も一段と激しさを増してきた。B 29の爆弾の至近距離への落下音を聞きながら(俺此処で死ぬのか。俺はかまわない

が、母がさぞ悲しむだろうな)と、不思議に死への恐怖はなく、母への思いだけがあつた。

昭和二十年六月には、沖繩も敵の手に落ち、次は九州だということが予想された。今や戦局は破局に向かって急速に歩みを進めていた。「大東亜戦争用具収め。総員玉碎の位置につけ」という号令が、兵士達の間で誰言うとなく伝播し、「俺達は白木の箱(遺骨箱)に入らねば家には帰れないが、その家も故郷も無くなるのだろう」と、戦友達とささやき合った。もはや戦死しても遺骨の帰る所さえ無くなるという絶望感に似たものが、九州出身の兵士達の間には広がりがあつた。母からは

「毎朝、陰膳を供えて御身等が無事に凱旋することを神仏に祈っています」

との便りがあつた。私はこの緊迫した戦局の中で、そんなことを願って祈る母が哀れで、悲しく切なかつた。

入隊以来肉親との面会も許されず、休暇などある筈もなく、故郷の駅頭の母の面影だけが私の胸から消えることとはなかつた。

希望の光とてない荒涼たる心の風景の中で、子から母へ、母から子へ絶えることなく吹く風は、絆の風であつたらうか。